

かぶと そで すねあて
兜・袖・臈当

種 別 重要文化財 工芸品
指定年月日 昭和 25 年 8 月 29 日
所 在 地 上本折町 (多太神社)

平安末期の武将・斎藤別当実盛さいとうべっとうきねもり着用のもので、木曾義仲が奉納したものと伝わる。寿永2年(1183)、斎藤別当実盛は平氏軍の武将として、木曾義仲追討のため北陸へ出陣する。しかし倶利伽羅峠くりにからとうげの戦いで平氏軍は大敗、加賀国篠原で両軍は再び衝突するも、平氏軍は総崩れとなった。

実盛はこのとき70歳を超える高齢であったが、老いを悟られぬよう髪や髭を黒く染め出陣する。踏みとどまり奮戦する実盛であったが、ついに義仲方の武士・手塚太郎光盛に討ち取られる。実盛は名乗らなかつたため素性が判らなかつたが、首を洗うと白髪に変わり、首は実盛と判明した。実盛は幼い頃の義仲を救った恩人であり、実盛の死を知った義仲は人目も憚らず泣いたという。

元禄2年(1689)、「奥の細道」の道中で当地に立ち寄った松尾芭蕉が参詣し、「むざんやな 甲の下の きりぎりす」と詠んでいる。また近世以降、遊行上人による実盛回向と多太神社への回向札の奉納が行われている。

